No.41

mi·ra·i·e

つなごう・未来へ

出版に働くものだからこそ、できること

2020年9月10日

編集・発行　出版労連（日本出版労働組合連合会）〒113-0033　東京都文京区本郷4-37-18 いろは本郷ビル2階

TEL 03-3816-2911　FAX 03-3816-2980　E-mail rouren@syuppan.net　URL http://www.syuppan.net/

「コロナ時代」を生きる

コロナ禍の出版産業から見えてくるもの

平川　修一（出版労連・出版研究室）

すべての産業が影響を受け続けている新型コロナウイルスの感染拡大である。感染拡大阻止への無為無策と、補償なき休業の強制によって生活を奪われた勤労者や中小零細企業の経営者を見捨てる「政治」＝現代地獄図について論じる場ではないが、一点だけお許し願いたい。政治＝経済エリートたちの「未曾有の日本経済の危機」発言を、あたかも“わがこと・わがもの”であるように刷り込まれた労働者・国民もまた「経済が回らない」「経済活動が止まってしまう危機」と思い込まされている現実に危機感を抱くのは考えすぎだろうか。以下、コロナ禍の出版産業とりわけ版元への影響を軸に業界を見ていく。

コロナ禍で「巣ごもり特需」？！

出版産業へのコロナの影響は2月27日の安倍首相の学校休校要請から始まった。学参ドリルや児童書が売れ始め、「巣ごもり需要」でクイズ＝パズル本、料理レシピ本、一部雑誌にも広がり、最近では在宅勤務関連書が好調である。

電子の伸びがすごい。学習もの、児童書、コミックが中心であるが、出版科学研究所調べでは2020年上半期（1～6月期）は、紙と電子合計の出版市場2.6%増のうち、電子は28.4%増（コミックが 30%増）とすこぶる好調であった。なかでも『鬼滅の刃』効果もあり、コミックは33.4%増の大伸長となった。電子図書館サービスも大きく伸びている（TRC）。

コロナ禍と出版産業

コロナ禍で二極化が進んだ。ここでは出版業界全体のそれを見ていく。

①コミックを中心にデジタルシフトの進んでいる企業とデジタル対応が遅れている中小零細や専門書版元との二極化は甚だしい。関連して②雑誌では紙とWebサイトとの連携が成功して好調なものと、休刊に追い込まれるものとに分か

れた。③一時期 Amazon が生活用品優先を理由に取次経由の出版物の販売を中止したが、直取引契約の版元は好調だったと聞く。④都心の大型書店の休業は専門書や人文社会系の版元に痛手だった。その一方で郊外店では品切れになるほど先に述べたジャンルの本が売れに売れた。余談だが、客数の多さに感染の危機を感じた従業員の訴えから休業にした書店もあったと聞く。

コロナ禍にあって出版経営は何を考える

版元の 3～6 月の現実をざっと見てきたが、コロナ禍によるダメージの小ささに驚く。他産業に比してあまりにも影響が小さい。二極化現象は企業間の格差を広げたが、平均すると産業としての落ち込みはなく数字は落ち着いている（8/23 現在）。

問題は今後だろう。予想される購買力の低下だ。内閣府が発表（8/17）した「4～6 月期の GDP 年率 27.8%減」は、リーマンショック後、消費税増税の後、購買力が落ち売上げが下がったことを想起せずにはいられない。そしてそれは回復せずに今日に至っている。いや、きっとそれ以上の事態が起きる可能性もあるのではないか。コロナ禍中聞こえてきた出版経営者の声や、容易に推測できる経営＝労務施策には警戒の必要がある。紙幅の関係で結論だけ記しておく。①営業不要論⇒オンライン書店営業の試みも進んでおり、書店・学校を「訪問しなくても数字が変わらない」という“結果”からの考え。②賃金制度の見直し⇒「努力や過程ではなく結果で評価できる在宅勤務」という理解にもとづく考え。この場合諸経費の節減もくっついてくる。

コロナ禍の他のメディアへの影響のうち広告収入減について最後に触れておく。テレビではスポット CM 収入が「衝撃的」激減、新聞はチラシの激減で販売店が悲鳴を上げているという。新聞本紙の広告収入減もあり宅配制度にも直結するだけに問題は深刻だ。

（出版研究室 http://syukken.syuppan.net/）

ベルリン三部作　全 6 巻

クラウス・コルドン 著

『ベルリン 1919 赤い水兵』『ベルリン 1933 壁を背にして』『ベルリン 1945 はじめての春』からなるクラウス・コルドンのベルリン三部作は岩波少年文庫という児童書のシリーズに入っているが、大人も子どもも必読の大傑作である。

第一部は 1918 年の皇帝を追放したドイツ革命。そして 1919 年のスパルタクス団の蜂起と敗北。ローザとリープクネヒトの暗殺、ドイツ革命の流産の廃墟にワイマール共和国の誕生。これが両親がスパルタクス団の労働者である 15 歳の少年ヘレの視点で描かれる。

第二部は 1933 年が舞台で、ヒトラーが首相になって全権を掌握し、突撃隊の暴力がのさばり、共産党は「社会ファシズム論」の下で、ナチの自壊を夢想しつつ、社会民主党を第一の敵とする。下部の労働者は社民党と共産党の共闘を模索するが、そこに国会炎上。これはヘレの弟で同じく 15 歳のハンスの視点で描かれる。

第三部は 1945 年で、ヘレの娘エンネ 12 歳の視点で、米英軍による無差別空爆とドイツ敗戦と東西分割までが描かれる。

ドイツ現代史の結節点を描いたこの『ベルリン三部作』が大人に広く読まれ、お子さんやお孫さんにプレゼントされることを熱望する。

価格　1200 円＋税（1 集）
発行　岩波書店
東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話案内 03-5210-4000

コロナ禍中の在宅勤務と組合活動

俵谷 晋三（出版労連副委員長）

私が再雇用で勤務する KADOKAWA はフリーアドレス化をめざし、2019 年からデスクトップからノート PC への切り替えが始まった。従業員全員に iPhone を貸与し、固定電話を廃止、社外に通知している外線電話番号は、Dialpad を経由して iPhone につながるようになった。固定デスクがないため、個人用のロッカーと郵便受けが設置された。この頃はまだ社内専用 PC と、高度なセキュリティーを施した「社外持出可」のセキュア PC の 2 種類だったが、私の部署は全員がセキュア PC を選択していたので、コロナ禍が顕在化してきた 3 月 11 日から週 2 日の在宅勤務が始まった。会社指示は「緊急事態宣言発令に備え、PC は必ず携行して下さい」だった。在宅勤務の日数は徐々に増え、3 月 23 日から出社は週 1 回 2 時間程度で、他は在宅勤務という体制が 8 月の現在まで続いている。在宅勤務の一日は、始業時に PC 内蔵の勤怠管理システムで「出社」をクリック、所属部署に slack で当日の予定などを通知、終業時にも slack で通知、「退社」をクリックというもの。勤怠管理はこれだけで、残業代や在宅勤務手当も支給されている、週に一度は Google Meet での会議があり、在宅勤務状況や会社の情報を共有している。4 月中旬までには派遣社員を含めた全従業員にセキュア PC が行き渡り、個人 Wi-fi の貸出が行われるなど、全社を通じて在宅勤務体制が整った。現在の在宅勤務率の目標は 80%である。

会社のデータベースやシステムにアクセスできるので、在宅勤務でも不便は感じないが、狭い家の中で完結する勤務に徐々に運動不足を実感し、週末は散歩を心掛けている。自宅から新大橋を渡り浜町河岸から浜町公園、甘酒横丁を抜けて文教堂人形町店で文庫を数冊買い求める。往復 1 時間、約 8000 歩である。Meet 会議後の雑談で、在宅勤務のあれこれを情報交換し、おすすめの低反発クッションを購入し、お尻と腰の痛みも劇的に和らいだ。

コロナ禍が拡大するにともない、感染防止の三密を避けるために、組合活動（情報関連ユニオン）でもさまざまな問題が起きた。春闘の要求提出団交や妥結大会を開催できない、争議支援のカンパ袋を職場に回せない、取次非正規対策の朝ビラは感染防止を考慮して延期 etc…。5 月からの出版技術講座は中止、出版労連の定期大会も早い段階での Web 開催が決まり、どのように運営するかの技術的な問題や参加方法をめぐる議論が続いた。例年は泊まり込みの組織争対部のロング部会は、一日でオンライン参加も可で開催。定期大会後の新中執会議も泊まり込みはない。「同じ釜の飯を食う」ではないが、会議後の交流会で酒を酌み交わすことで生まれる連帯感を重視してきた古いタイプの私にとっては、何とも物足りない限りである。

しかし、時代は変化している。組合員間の連絡方法も、掲示板・電話・FAX からいつの間にかメールが主になった。オンライン会議に当たり前のように参加しているなど、一昔前には想像もできなかった。ガラケーが普及してからまだ 20 年しか経っていない。いつからかスマホを携帯している。技術革新が日々進む中で暮らし、「＃検察庁法改正案に抗議します」というツイートに 1000 万ものリツイートがあり、法案を葬り去ったのは記憶に新しい。私たちは知らないうちに、使い方次第では強力な武器になりうる機器を携帯しているのだ。

感染を拡大しているとしか思えない「Go To トラベル」キャンペーン等、安倍官邸の無策によるコロナ禍は当面続くだろう。対面できなければオンラインでなど、組合活動は模索しながら続けることになる。職と食を護るための組合活動は、どんな時でも工夫を重ね、停滞することがあってはならないのである。

進む監視社会

白石 孝（プライバシー・アクション代表）

事の始まりは、迷走の末に決まった特別定額給付金支給。4 月時点ではまだ迅速に 10 万円が配られるという幻想があった。だから「マイナンバーカード」でオンライン申請すれば早く受け取れると、「思いこまされた」人びとが、カード申請で役所へと向かった。加えてカードをすでに取得している人が、必須の暗証番号をエラーし、その更新のためにやはり役所に行った。

その結果、役所のマイナンバー窓口には長蛇の列ができ、ようやく申請が受理されても、受け取った役所では内容確認のため 1 件ずつ手作業で照合することとなり、途中からオンライン申請を中止する自治体も激増する事態になった。

給付の仕組みだが、4 月 27 日現在での住民登録者が対象（DV 被害や野宿者問題は字数の関係で省く）で、住民基本台帳上の世帯主に給付する。その情報をプレプリントしたものを郵送、受け取った世帯主住民は内容を確認、受領の是非をチェック、振込口座を明記し、本人確認書類と口座記載面をコピーして同封、返送する。これだと、給付要件の確認はしなくてもよく、形式的チェックで済む。

市役所から届いた申請書には、市独自の市民番号を記載している自治体はあるが、「マイナンバー」は全く記載されていないし、その必要もない。今回の「騒ぎ」は、普及率 17%（2200 万枚、7 月 1 日）と低いマイナンバーカードを、この機会に増やそうという狙いが裏目に出た典型例で、むしろカードへの信頼感は低下した。

そして次に控えていたのが、マイナポイントだ。9 月から来年 3 月までの 7 か月間、電子マネーやスマホ決済の買い物のチャージに利用、2 万円消費で上限 5000 円分が付与される。これに 4000 万人分、2000 億円を予算措置している。

ここにも問題がある。まずは、カード所有者が 2000 万人余りしかいないことだ。おまけに手続きも、①カード取得、②ネットなどでアプリ（ソフト）をダウンロード（暗証番号必須）、③マイキーID 取得、④登録事業者から 1 社だけ指定。これでようやく使えるという面倒くささが待ち受けている。7 月 1 日から申込み開始で予約者数（マイキーID 設定者）は、7 月 12 日時点 210 万人、申込者（決済サービス選択者）は約 115 万人。

これだったら、昨年の消費税増税時に一部住民に適用した「プレミアム付商品券」をコロナ禍対策に実施している自治体の方が、はるかに気がきいている。手続きが簡単で、地域の商業者へも還元され、マイナポイントより上乗せしている地域も多い。

肝いりで導入された「新型コロナウイルス接触確認アプリ COCOA」も 7 月末で登録者約 1000 万人と伸びていない。1 億 2700 万人の 5 割から 6 割が登録し、陽性判定者が自ら申請しなければ効果が薄いと言われているが、スマホ保有率が約 84%なので、その 7 割が登録しないとダメだ。

ただ 7 月 17 日に閣議決定された「骨太の方針 2020（経済財政運営と改革の基本方針）」でも「デジタルニューディール」を大きな柱に掲げ、マイナンバー制度を大々的に推進しようとしている。マイナンバーとカードの利活用方針は、15 年 5 月の青写真を踏襲して進められている。

一見無関係に見えるが、中国がいま進めているデジタル監視社会を日本も指向している。中国では全土に 2 億台（22 年には 6 億台）の監視カメラと顔認証技術、それに携帯電話の通話・位置情報、電子決済や交通利用記録を合わせ、詳細な行動管理、監視が可能になっている。

住民や企業などから集めた様々な情報を「データ連携基盤」（都市 OS）に集約し、AI などの最先端技術で連結させ、サービスにつなげる「まるごと未来都市」をめざすスーパーシティ法も合わせ、日本は監視社会化へと確実に向かっている。

「医療崩壊」ってなんだ

青山 光（東京地方医療労働組合連合会書記長）

「コロナで『医療崩壊』を起こさせないために」と、よく耳にします。『医療崩壊』というものに明確な定義はありません。

ある埼玉県民の一例。19 歳の娘がこの 8 月 8 日（土）夜に 39 度の高熱を出し、翌日も続く 38 度台。「これは？」と病院を探すことにしました。

県設置の埼玉県新型コロナウイルス感染症県民サポートセンターに問い合わせると「その症状なら近隣の医療機関、もしくは＃7119（救急相談センター）に連絡を」と。問い合わせましたよ。市内の救急指定病院と休日診療所は、発熱患者は診ない、平日に発熱者外来へどうぞ。＃7119 に電話すると、近くの救急対応病院か休日診療所に問い合わせなさい、と。

症状があったら来ないでください、という医療機関とは…。コロナ感染を恐れて発熱患者が敬遠される例を身近で体験しました。

以前から、人員体制が薄い交代時間付近などの救急搬送はたらい回しにされ、受け入れ先が見つかるまでに時間がかかることは頻繁に聞く話でした。『医療崩壊』って一体何なのでしょう。

医療や介護は公的保険制度、保険診療が支えています。保険証 1 枚あれば、全国どこでも最善の医療が受けられる仕組みです。

1 点 10 円の診療報酬制度で、診察は何点、この検査は何点、人員や設備など一定基準を満たした入院は 1 日何百点、とそれは細かく決めています。患者に対する医師の診療行為について、保険が各医療機関に 2 か月後に支払います。その費用の一部（現行 3 割）を患者が窓口で支払います。ざっくりいうと、このようなシステムになっています。

病院から見た場合、基本出来高ですから、患者が減れば、収入が減ります。点数は 2 年に 1 度、厚生労働省の審議会で決めます。

点数配分は全体が低い問題に加え、感染症等の分野は相対的に低く、診れば看るほど赤字になります。日本の医療機関は民間の事業者が諸外国に比べても多いので、今回のような、いわゆる不採算の症例は受け入れに抵抗が出ます。実際に東京都で確保しているベッドの多くは都立や自治体立病院、旧国立病院であり、民間や大学病院等では要請しても一気に進むという状況ではありません。税を運営費として直接投入できる公立とそうでない民間は違っており、採算のとりにくい医療は公立・公的病院が支えているのが現状、実態です。対して、歴代政府は医療費全体の圧縮と合わせ、財政効率を優先させる公的医療機関の統廃合を含めた「再編」を進め、東京都は保有する都立・公社病院に対して独立採算制を強力に求める独立行政法人化を決定しました。このコロナ禍に、です。

収入激減で夏のボーナスがゼロに（東京女子医大病院）、と報道され、多くの方が応援、組合も頑張りましたが、大本にある危機的な現行制度と、制度解体とも呼べる社会保障費削減政策について、メディアに取り上げてもらいたいものです。

新型感染症の拡大を防ぐには、予防に加え、検査と隔離、早期治療で重症化を防ぐ、しかありませんし、罹患したその先を支える十分な医療提供体制という備えがなければ現実に対応できなくなります。

以前から、医療・福祉の現場には余裕がありません。基準を上回る人員配置を行えば、たちまち赤字になる診療報酬制度。長時間過密労働の蔓延、過酷な夜勤交替制勤務、高い離職率、人手不足は全国共通した問題です。

「税と社会保障の一体改革」ではなく、必要な医療提供体制を維持・拡充する真の改革を求めて、労働組合は現場から、運動を進めます。

コロナ禍に考える ： 地球温暖化と感染症

北林 岳彦（出版労連原発問題委員会事務局長）

特集タイトルに準じ、特に地球環境破壊と新型コロナウイルス感染症の関係について書くのが与えられた課題ですが、先住民族への感染危機も含めて考えてみます。

7 月末時点でブラジルは累計で感染者が 300 万人を超え世界第 2 位、死者もわずか 1 か月で倍増し 10 万人超。最悪のパターンに陥っています。政治責任も問われているボウソナロ大統領自身も感染。熱帯雨林に住む先住民族も抵抗力がなく、18 人もの族長が死亡する危機に瀕しています。すでに 5 月初旬には写真家サルガド氏が先住民保護を訴える声明を世界の著名人の署名とともに大統領に提出しています。

国連機関である世界保健機関＝WHO は社会のグローバル化と貧困・地域格差を介した感染症の拡大に警鐘を鳴らし、予防や治療のキャンペーンを行ってきました。しかしその感染性疾病の多くが熱帯起源であるとされるのに、熱帯雨林地域に生きる先住民族を今脅かしている「新型コロナウイルス」感染症は、温帯地域の中国出自。いわれているように「コロナを止めるために熱帯雨林破壊をやめよ」とは短絡が否めません。

たしかに WHO や感染症研究者たちは、深刻な森林破壊によって感染症が拡大、新たな感染症の流行も懸念されると警告してきました。特に 20 世紀末の森林開拓と大規模な火災でオオコウモリが「避難」し、移動先で「ニパウイルス脳炎」がブタを介してヒトに感染したマレーシアの事例。また西アフリカでのエボラウイルス症の流行も宿主であるコウモリとヒトとの接触機会が増えていることが原因のひとつとして指摘されています。

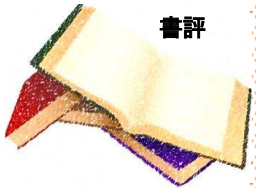
開発により住処を奪われ、ヒトの居住地域に拡散し、危険な感染症を媒介しているのはフルーツバットと呼ばれる草食性のオオコウモリです。意外にも致死率の高い狂犬病などを媒介する吸血コウモリではないのです。

一方、中国・武漢で発生した新型コロナウイルス感染症・通称 COVID-19 も食材・漢方薬材料としてのセンザンコウを仲介経由したものの、キクガシラコウモリ（昆虫食）が持っていたウイルスが変異したとの説が有力です。コウモリは極めて多数の個体が密集する生態からさまざまなウイルスの天然培養基になっていると考えられ、変異による未知の病原体を保持する可能性が強いようです。

こうなると新たなウイルス禍と次々に直面することで、人間社会は停滞や混乱を繰り返すようになってしまうのでしょうか。

たしかに熱帯雨林の開発によるコウモリ由来の感染症暴露・流行は一定パターンがあり今後も次々にコウモリを宿主にしてきたウイルスの感染症が発見される可能性があります。ただし中国が発生源である COVID-19 の場合は直接開発との因果はありません。瞬く間に世界に感染拡大したことをみると、グローバル資本主義によるヒトの移動のかつてない活発化が助長している側面は指摘できるでしょう。ブラジル先住民族の感染危機は違法な金採掘者が媒介したともいわれています。

すべての新型ウイルスが爆発的感染をもたらすわけではなく、毒性・致死率が高くても感染力は弱い場合もあります。一方ウイルス感染症を離れてみても、気候変動による気温上昇によって、原虫類を媒介する蚊が生息域を拡大するなどのリスクは拡大しているとの警告があります。おりしも日本政府は温室効果ガスの削減目標を見直しもせずに国連に提出、顰蹙を買っています。「安全な世界」はもはやない。座視していては健康さえ守れない時代に入ったことは確かでしょう。



『ペスト』

アルベール･カミュ 著　宮崎嶺雄 訳

1969 年 11 月　750 円+税　新潮文庫（原著発行 1947 年）

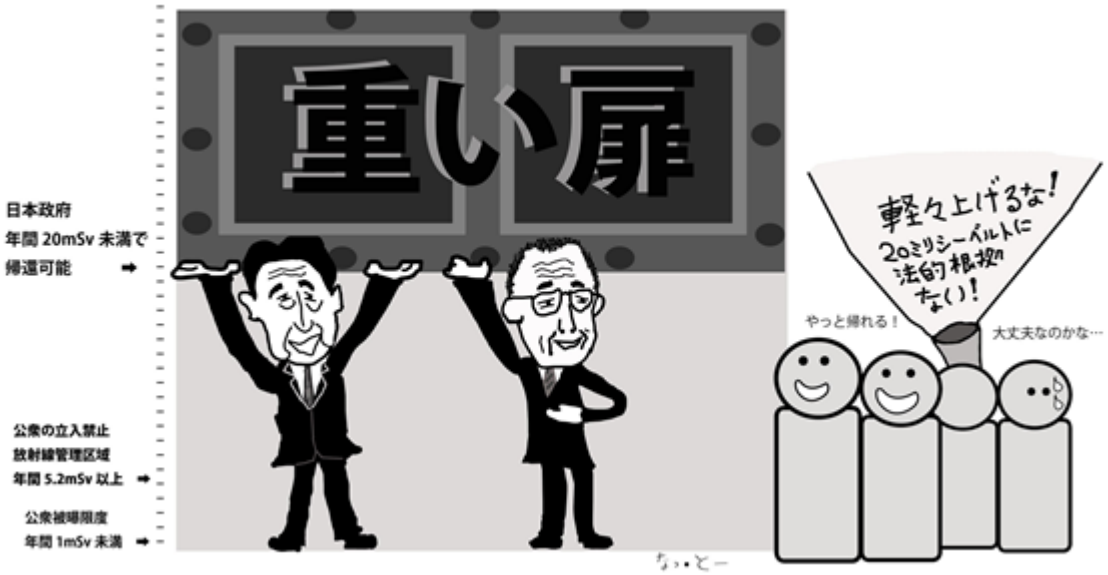
1960 年、46 歳で“不条理”な交通事故死を遂げたノーベル賞作家・カミュの名作である。アルジェリアの港町オランで、ネズミの大量死を号砲としてペストが蔓延し、多くの人が死んでいく。人々は驚愕と不安と恐怖に包まれていく。町は都市封鎖され、通常の経済活動は停止する。この“不条理”な限界状況の下で、人間はいかに生き死んでいったのかの記録である。

絶望的な限界状況を受忍せざるを得ない中で、医師の責務を淡々と果たす主人公のリウー、神の罰を説教する神父のパヌルー、記録を取る役場の吏員グラン、脱出を試みる記者ランベール、事態の観察者タルーらの自己変革と自己肯定の「報告書」が見事な表現で綴られている。

ペストが医師リウーにとってどういうものなのかを問われ、「際限なく続く敗北です」と彼は答える。誰が教えてくれたのかと問われ、彼は即答する。「貧乏がね」と。社会と真摯に向き合うとき、私たちは社会と己を変える実践に踏み出すのではないだろうか。そんなことを考えさせる小説でもある。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックの下で、逃げ場のない状況に追い込まれている私たちは、日々、ピント外れで誤謬に満ちた政策や、医療関係者の奮闘への軽視や、雇止めなどで貧窮のどん底に叩き落されている労働者、学生、自営業者が見捨てられている現実に憤怒を覚えている。火事場泥棒のように、改憲や敵基地攻撃能力の保有を企む安倍政権の動きに激しい怒りを燃え立たせている。この現実を変えていかねばならないという思いと通底させて読むといっそう生きてくる小説だ。

（小山比路志）



福島発リレーエッセイ『被災と向き合う日常から』68

心は立ち止まったまま

小林 休（日本基督教団鳴子教会）

2020 年 3 月 4 日午前 0 時、双葉町の一部の地域が避難解除となりました。新聞や報道では、復興に向けた「大きな一歩」という文字が躍ります。本当にそうでしょうか。

今年の 1 月、双葉町の舘林さんにお願いし、福島第一原発から 3 キロの帰還困難区域内にある自宅と墓地に同行させていただきました。先祖のお墓に花を手向けた後、隣接する畑に移動した瞬間、突然舘林さんは声を荒げました。荒れ果てた畑に無残な状態でイワヒバが置かれていました。すべて売り物として栽培していたのに、賠償の対象にならなかったのです。何十年も苦労し、手塩にかけて育ててきたものを一瞬で失い、しかも賠償の対象にならない悔しさは本人しかわかりません。人にもよると思いますが、賠償は「せめてもの報い」ではないでしょうか。費やした時間、汗、苦労はお金には換えられません。それでも「せめてもの報い」としてお金をもらい、どうにか気持ちに区切りをつけ、前に進める人もいます。しかしそれすらなかったら、その気持ちをどこに持っていったらいいのでしょうか。帰宅するたびに、つぎ込んだあの時間、あの苦労、あの汗はいったい何だったのか、どうしてこんな目に合わなくちゃならないのか、誰が悪いのかという思いが何度も何度も沸き起こるのです。

自宅に案内されましたが、どの部屋も目を覆いたくなる信じがたい惨状です。泥棒やイノシシに荒らされ、ネズミや小動物にかじられ、糞尿がまき散らされ、まさに足の踏み場もない状態です。しかし、どんなに変わり果てた家であっても、舘林さんにとっては紛れもなく家族と何十年も過ごした「暮らし」と「団らん」の場です。落ちているものを拾っては、これはあの時の〇〇だ、これは妻と娘が〇〇した時のものだと話し始めます。洗濯物も 9 年半前のあの日に干したままの状態です。そこにあるすべてに決して色あせることのない思いや思い出が刻まれ、帰るたびによみがえるのです。地震や津波で何もかも失うことも悲しいことですが、そこに何もかもあるのに、どうすることもできないこともまた悲しいことです。心は立ち止まったままです。

編 集 後 記

世界中で懸命なコロナ対策がとられています。そんななか、突然の首相辞任が報じられ、メディアでは次期首相の話でもちきりです。7 年 8 か月の政権運営を徹底的に総括し、モリ・カケ・桜など、未解決の課題の解明が待たれます。しかし、9 月以降の政権が、国民を分断した現政権の諸政策を継承するのであれば、山積する課題は解消されないでしょう。現時点で優先順位の高い課題はコロナ対策です。今号では「『コロナ時代』を生きる」と題し、コロナ禍での出版業界の現況と変わらざるを得ない働き方や組合活動の在り方を考えます。同時に、感染拡大阻止を名目とした監視社会の進行と医療崩壊に直面する現状を報告し、地球温暖化と感染拡大の関係を考えます。現政権の不十分なコロナ対策を抜本的に見直し、改善させるために、また、この 7 年 8 か月で失ったさまざまなものを取り返すためにも、いまこそ政治に注目し、声をあげるときではないでしょうか。（T）